
精霊の妹

sumita

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊の妹

【Nコード】

N2064U

【作者名】

sumita

【あらすじ】

——精霊の森、人も神も不可侵の土地に迷い込んだ人の娘。その娘が、罪を贖う間の「私」の物語——男性視点です。数話で終わります。

迷い子（前書き）

脳みそ整理の為に書かせて頂きました。数話で終わりますので、許して下さい。

迷い子

彼女は唐突に現れた。

我々の森の奥深く、人も神も手出し叶わぬその場所に一人佇んでいた。

否、呆然としていた、といって良いだろう。

「あ、人いた！ すみませーん」

私は人ではない。しかしその否定をしたことで、いかほどの益があるのか。

「いきなりで申し訳ないんですけど、ここってどこですか？」

「ここはルヴェルの森、人如きが踏み入って良い場所ではないと、知っておるのだろうな」

「ルヴェル？ それって国立公園ですか？ すみません、私気づいたらここにいたんです」

悪びれもせずただ困惑気な顔に苛立つ。

ルヴェルの森も知らないとは、余程田舎から来たのか、または生まれつきの馬鹿か。

いや、人間の中には悪魔信仰をしているものもいる。コイツもそうかもしれない。

少女はありふれた茶色の髪に茶色の瞳と、ごく一般的な色彩を持っていた。

ただ服装は異様だった。

娘服の特徴であるスカート丈は以上に短く、白いやや太目の腿はむき出しになっている。

その上に何処の民族か判別出来ない服を着ているが、それも袖が短く少し寒そうだ。

そして最も不思議なことに、この私に睨まれていても少しも恐れていなかった。

「あのう、ここの管理とかしてる人いませんか？ あ！もしかして貴方ですか？ すみませんが電話を貸していただけませんか」

いちいち疑問の多い娘だ。

「ここは我々の森だ。人が管理するなどありえぬ。デンワというのは知らぬ」

そう言えば、娘は初めて困ったような顔をした。

「どうしよう・・・もしかして外国のコスプレフェスの最中とかかな・・・なりきってるのかな・・・セーラー服ってコスプレだと思われてるのかな？」

ぶつぶつと意味の分からない言葉を一人で喋っている。どうやらここを立ち去る気はないらしい。

面倒だ。さっさと出て行けばいいのに。

苛苛していれば、同胞が泉の中から顔を出した。

「火の！ 何してんの？ 君が近くにいと熱いからすぐ分かるよ」

「水の。馬鹿な人間の小娘が迷い込んだらしい。ほらそこに」

「ありやまあ、可愛いそうに」

音を立てて水中から浮かび上がり、近づいてきた水のに、娘は口をぽかんと開けて固まっていた。

「み、みみみみみ」

「ふうん、普通の子だね、神子でもない」

「水の」

私の居る場所からは水のが娘に口付けているように見えた。破廉恥な。

「水から出てきたあ!」

「当たり前だろう! 少し黙っている!」

苛苛する。私の声に娘は口をきゅつと結んだ。涙目になっている。水のは面白そうに、にやりと口許を歪めた。

「泣かせたね? そんなにこの娘が気に入らないの?」

「・・・ああ気に入らぬ。人など皆、気に入らぬ」

「かわいそうに・・・折角無殺生だったのにね。穢れてしまったよ、君」

「!」

「け？」

娘はぼろぼろと瞳から涙を流している。涙は大地に落ちて、染み込んでいる。

——しまった。

「恨み言ならば、その意地悪な男にいいな。残念だね。もう帰れない」

「かえ、れない？」

この森は、我々の精霊の清められた森。

人が踏み入ってはならぬ理由がある。

一つは、殺生をするからだ。人間は知らず知らずの内に、その気が無くとも小さな命を踏み潰す。精霊によって守られ、無駄な殺生を禁じられたこの森で、それは万死に値する。

もう一つは、その体液による森の穢れ。血は以ての外、人間が美しいと言う涙さえ、ここでは穢れとみなされる。

水のの言うとおり、この娘は奇跡的なまでについ先程まで条件を満たしていた。

条件とはつまり、五体満足で生きたまま、この森から帰ることのできる条件である。

しかし、私が泣かせてしまった。

この少女は、帰れなくなってしまった。

その罪を贖うまで。

迷い子（後書き）

精霊に名前はありません。

1 日目

精霊としてこの世界に「存在」を与えられてから、数百年。これ程までに後悔した事は、いまだかつて無かった。

「君に罪は無い。しかし、穢れは祓わねばならないのだ」

娘は理解できない、という表情で我らの長を見つめていた。

「痛みはない——君に、僕が知る中で最も優しい死をあげよう」

我らの長は、彼女に告げた。

娘は、名を「ユキ」と言った。

彼女がどうしてこの森にいたかは、長が原因を突き止めた。どうやらこの世界の人間が、戯れに彼女を召喚したらしい。その人間どもは精霊の名で今頃、制裁という名の罰を受けているだろう。

しかし、それでも彼女が死ぬことに変わりはない。救いようの無い話だ。

「火の精霊さん、意外に熱くないんですね」

彼女は私の腕の中で驚いていた。純粹に。

何故腕の中に彼女がいるかと問われれば、そう長に頼まれたからだ。不可侵のこの森に不可抗力で落とされた彼女に罪はない。

しかも、彼女は一切の殺生をしていなかった。

ここまでは、良かったのだ。

しかし私が涙を流させてしまった為に、彼女は森に穢れを与えてしまった。

だからその咎を受け、彼女は三日間断食をし身を清めた後、長に死を与えられる事になってしまった。

これ以上罪を重ねぬよう、彼女が殺生をしないように配慮して抱きかかえているのだ。

そして彼女の死は、半分私の責だ。

だから、三日の間は彼女が心地よく過ごせるよう尽くす。

それを私は長に命ぜられた。

しかし、命じられなくともそうしただろう。

この娘は、私が殺すようなものだから。

「ああ・・・他の精霊は熱いと言うが」

熱さを感じないのは、彼女が長によってその感覚の一部を麻痺させられているからだ。

精霊ほど敏感ではないが、人間も私に触れば熱さを感じるだろう。

それもかなりの。

また彼女は死の時まで何も口にしてはいけないから、空腹を感じる神経も麻痺させられている。

しかし長の強大な力を持つてしても、「死の恐怖」までは麻痺させることはできない。

だから彼女の恐怖を和らげることも務めだと、私は思っている。

「私、ファンタジーな小説とか漫画とか大好きだったんです。だから、ほんとに精霊さんがいて嬉しいです」

魔法はありますか？ と、彼女は私に尋ねた。

「ああ、人間が使うものだな」

話しながら、彼女を自分の領域である岩の大地に下ろした。

岩の上ならば小さな生き物を殺すことも無い。

ただ、座るのも寝るのも痛いだろうから藁と枯葉をたっぷり敷いた。

彼女はキョロキョロと周りを見ていて、どうやら落ち着かないようだ。

だが、どうしたらいいのか分からない。
人間と言う生き物を何度か目にしたことはあるが、どういつも彼女とは重ならない。

稀に森に入ってくる人間は、どいつも欲の塊の卑しい魂を持っていた。

だから、我々は躊躇無く殺してきた。

その点では、彼女は我々が初めて思いやりを持って殺す人間になるのだろう。

「火の精霊さん」

「何だ」

ぶっきらぼうに答えてしまったから、後悔した。

もっと優しくしてやろうと思った矢先なのに、また冷たくしてしま

った。

「ごめんなさい」

——今彼女は何と言ったのだろう。

ごめんなさい、は謝るために使う言葉だ。

自尊心と自我の強い精霊の口からは決して出ない言葉だ。

「なぜ、謝る？」

お前は何もしていない。

お前に罪は無い、長もそう言ったのに、聞いていなかったのか？
いや、彼女は間違いなく聞いていた。

「私が、あの時泣いたから、火の精霊さんは悩んでるんですよ」

——悩む？

悩むとは、何だ。

「大丈夫です。死んだお父さんが、人間はいつか必ず死ぬ時が来て、それは早くても遅くても神様次第だから仕方ないって言っていましたから」

「——親は、もういないのか」

精霊には、親と言う概念が無い。

精霊は世界がその「存在」を認めたときに世界から生まれるからだ。親というものがあるならば、それは世界であり世界を構成する魔力

だ。

精霊同士は兄弟に近いが、それも人間ほどに親密ではない。だから、亡くした悲しみは分らない。

けれど、人間が己を失うほど悲しむということは知っている。

この少女は、こんなに幼いのに、親を亡くした悲しみに耐えてきたのだろうか。

そう思うと胸が張り裂けそうだった。

なのに、彼女は微笑んだ。

「両親は事故で死んじゃいましたけど、兄がいます。だから、寂しくなんてなかったです」

嘘だ。

精霊は、真実に敏感だ。

だから人間が嘘をつけばすぐに分かる。

けれど、こんなに切ない嘘は、初めてだった。

「ほんとに気にしないで下さい、むしろ、病気とか事故とかで苦しんで死ななくていいので、

・・・いいんです」

「そう、か」

彼女の微笑みに呆然としていたら、すぐに夜が来てしまった。

精霊の森は寝静まる。

そして彼女も。

「あのう、すみませんがほんのちょっと明るくしてもらえませんか？」

「……このくらいか？」

彼女はそのくらい、と藁の粗末な寝台に横になった。
この寝台は彼女の為に用意したものだ。

私は普段岩の上で寝ているから、そんなものは無い。
それに藁や枯葉の上で寝れば、あっという間に火の手が上がってしまふ。

「ちょっと明るくないと眠れなくて」

そういえば、今夜は月が無かったな。

「星、綺麗です」

そうつって、彼女は眠りに就いた。

1日目は、終わってしまった。

2日目

朝起きたら、娘はこの世界を見て回りたいと言った。

「あのう、その、上から眺めるだけでもいいので」

「——すぐ行こう。長に許可を貰ってくるから、ここで大人しくしている」

「はい！」

可愛いと思った。

人間も、あのように育てば何と可愛い生き物なのだろう。

動物達も可愛いが話す内容に答えが返ってきたりはしない。

彼女は正に打てば響く、といった感じで一緒に居て実に楽しい。

本当に、殺さなければならぬのか？

彼女が昨夜眠っている間に、少し魂の記憶を覗かせて貰った。

そうして、私は己のしでかしたことの重大さを、より実感したのだ。生まれてから、何の罪も無いまっさらな魂など無い。

そしてそれは輪廻に組み込まれる間に溜まり、人間など大抵が見るに耐えない。

しかし彼女は違った。

もちろん罪の無い魂ではなかった。しかし、それは決して重くなかった。

あと一度——つまり今の人生で、大きな罪を犯さなければ彼女は我々のような存在になっていたかもしれない。

精霊はかなり特別だが、きっと彼女は精霊以外の徳の高い御霊^{みたま}となつていたはずだ。

それを、私が台無しにしてしまった。

「長、彼女が森の外を見てみたいと言つのですが、良いでしょうか」

「ああいいよ。ただ人からは見えないようにしなさい」

「はい・・・それと長」

長は手を軽く挙げ私の次の言葉を制した。
私を見るその目に、嘲りなどは無かった。
それは、弱きものを慈しむ瞳だった。

「火の、お前の言いたい事は、僕の思うことだ」

「では」

「しかし、我々はあくまで世界の子供だ。親の言いつけを破ることはできない。・・・そうだろう？」

「長・・・」

「早くお戻り。ユキが寂しがつているよ」

「——はい」

世界とは、我々にとって絶対の存在。
やはり、あの娘は赦されないのだろうか。

彼女のもとへ戻れば、どうやら同胞が訪ねて来ているらしい。
少女の軽やかな笑い声が聞こえるから、わかる。

「お帰りなさい！」

「よお」

「お前か、風の・・・」

風のは優しい。水のよりは、遥かに優しい。

風貌は水のほうが少年くさく、優しげに見えるが、その実態は正
反対だ。

水のは精霊の同胞でもひねくれていると評判だ。

その点、風のは容貌は荒々しいが内面は非常に穏やかで優しい。

「水の子にな、人間の女の子が難儀していると聞いたんだ、ほら」

「わああ」

風のは、小さな風を使って娘に芸を見せていた。

娘は非常に喜んでいる。

私も、昨日見せてやればよかった。

「今度水のと共演してやる、綺麗だぞ」

「火の精霊さんは？」

「ダメだな、火事になっちゃうだろ」

「・・・そうですか」

娘は残念がつていた。やはり、後で見せよう。いくらでも、彼女が望む限り。

「長が許可を下さった。見に行くのだろう」

「はい！」

「お、どこか行くのか？」

「ああ、人間の町を見せるんだ」

食べ物だ。人間の若い娘が好む演劇でも見せてやろうか。それとも娘の世界にないと言う魔法や珍しい生き物もいいかもしれない。

「なら、俺も手伝おう」

結局私と彼女、それから風で行くこととなった。彼女が望んだのは、以外にも普通の城下町だった。

特に「レンガヅクリ」や「オシロ」が見たいと言ったので、抱きかかえたまま空を飛び、見せた。

町は、特に王城は華やかで何かの祭りをしているようだった。

「わあすごいすごい！ 本物だー！」

子供のようにはしゃぎ遊ぶ彼女に、知らず知らず口許が緩んでいたらしい。

風のに指摘されるまで気づかなかったとは、不覚だ。

「何のお祭りかな・・・もう少し近づいちゃ、ダメですか？」

「いいや、我々は基本人に見えないし、今は姿が見えないようにしている。大丈夫だろう」

彼女が喜ぶので、つい高度を下げてしまった。

風のに、一度偵察して来て貰えば良かったのに。

城の中は一部だけ城下の人間に解放され、非常に賑わっていた。様々な出店が並び、旅芸人が魔法で演技し、人々は姿を見せた王族に歓喜する。

それが彼女の眼には余程真新しかったらしい。

彼女は始終眼をキラキラさせていた。

ずっと、見せてやりたいと思った。

こんなに喜ぶならば世界中の王城を見せてやりたい。

私が人の振りをして、彼女を連れて祭を案内してやりたい。旨い物を食べさせてやりたい。もっともっと教えてやりたい。

彼女に喜びを、楽しさを。

なのに、時間は過ぎてゆくばかり。

私は「やるせない」という気持ちを、初めて味わった。

「火の精霊さん、あれはなんですか？」

「ああ、あれはこの国の王子が出し物で挨拶するらしいな」

「何をするんでしょうか」

「・・・魔方阵のようだ」

しかも、召喚の魔方阵だ。

まさかと風を見れば重い表情で首を振っていた。

娘には人間の戯れの召喚が森に来てしまった原因と告げてある。
人間の召喚の魔法など、決して見せられない。

「帰ろう、ダメだ」

「え？ でも・・・」

彼女を一刻も早くこの場から放そうとしたが、時既に遅し。
召喚は、行われた。

この国の王子はバルコニーで召喚を行った。
王子が呼び寄せたのは、黒髪の美しい娘だった。
どこことなく、腕の中の娘に顔立ちが似ていた。

『おお、成功したぞ！』

『王子さま、お姫さま、万歳！』

「成功・・・」

腕の中から、か細い声がした。

喜び湧く民衆の声に押しつぶされそうな、小さな呟きは、けれど我々には届いた。

「帰ろう」

「待つて」

「ユキ！」

ユキの目はバルコニーに立つ王子と、王子の腕に抱かれる黒髪の娘、そしてその二人を見守る国王夫妻に向けられていた。

王子が黒髪の娘を抱いたまま、民衆に向って声を張り上げた。

『皆さん、この娘は私が花嫁にと選び呼び出した娘、この城で然るべき教育を受けた後、この国の母となる娘です。どうか私たちを祝福して下さい』

民衆が、手にそれぞれ布を持ち、王子に向って振った。

『王子さまお幸せに！』

『お幸せに！』

『良かったな、王子さま。昨日は失敗しちまったが』

『まさか汚ねえ茶色の娘が現れるなんてな』

『災厄の元だからって、娘が起きる前にどっか適当に飛ばしちまったんだろっ？』

『気にするな、あれはきつと悪魔の娘だったんだ』

それ以上は聞かせられず、私と風のは全速力でその場を離れた。

夜に森についたが、ユキは何も言わず眠ってしまった。
2日目は、こうして終わってしまった。

3日目

3日目の朝、長が岩の大地にやってきた。

「明日は日の出と共に起き、朝露を染み込ませた新しい綿の布で体を拭きなさい。その後は陽が真上に昇る前に岩室^{いわむろ}へ入るんだ。・・・その後は、僕が傍にいるから」

「・・・はい」

彼女にこう告げたのだった。

長は彼女の髪を撫でて言った。

「次に生まれ変わってなりたいものはあるかい？ 希望はなるべく叶えよう」

「生まれ変わる・・・」

「そうだ。記憶は残せないがね」

彼女は考えていた。そして、私をおもむろに見た。

何か言いたそうに唇を動かしていたが、やはり首を振った。

「いいえ、特にありません。でも・・・人間は、嫌です」

「分かった。その希望は叶えられるだろう・・・今日を、大事にしないさ」

人は、精霊や他の生き物と違って己の死期を悟ることができない。

なぜなら、恐ろしいから。

人という生き物は精神が脆くできていて、己が死ぬことを知れば、恐怖で気が狂う者もいるという。

彼女は必死に自分を律し、それを抑えているように見えた。

「・・・ユキ。今日は、良い所に連れて行こう」

ユキは、昨晩から口を利いてくれない。

仕方ないことだ。私に責める気持ちは欠片も無かった。

ユキを抱き上げ、慎重に空を駆けた。

それ程時をかけずに、私は大地に足を下ろした。

ユキから見ればそこは元いた場所と大差ない荒れ果てた岩と土の大地だ。

しかしここには、彼らがいる。

「ドラ・・・ゴン・・・」

赤茶けた大地。

同じような色の鱗を持つ彼らは、ユキを見てはしゃいだ。

ドラゴンをこんなにも近くで見て恐れない人間も珍しいが、その人間に嬉々として近寄る彼らもまた、珍しい。

「キレイ……」

ぐるぐると喉を鳴らす様は、生命の頂点に立つようには見えない。

ユキに鼻を撫でられて、ご満悦のようだ。

涙がこぼれそうだった。

こんなにも美しい命を、散らすなんて。

それも明日。

そんな考えを廻らせた己を叱咤しなければいけないと、平手で頬を打った。

ユキとドラゴンは驚いたように私を見ている。

「火の精霊さん……大丈夫、ですか？」

驚きで飛び去ってしまったドラゴンより、私を心配してくれる。

お前は、何て優しいんだろっ。

お前は、何て美しいんだろっ。

お前は、何て悲しいんだろう。

「ユキ……すまない」

「え？ 何がですか？ ドラゴン君なら気にしないでいいんですよ？」

ふわりと微笑む。

—— 嗚呼。

精霊は何よりも清浄な生き物なのに。

お前を、穢したいと思った。

いとしい。

いとしいと、思いのまま伝えれば、ユキはとたんに赤くなった。

どうしたのか、もしや病かと心配になった。

「ずっと……ずるいです、というか、ひどいです」

何がだ。

「どうして、そんなこと言うんですか？ 私、明日には死ぬのに……」

そんなの、決まっている。

「ユキを、見つけるためだ」

そして、3日目はゆっくりと過ぎていった。

3日目（後書き）

そして、最後の日。

そして最期の日（前書き）

人が死にます。嫌な方は、話の流れは分かりますが次話へどうぞ。

そして最期の日

別れの朝、彼女は長に指示されたとおりに体を清め、岩室へと無事に辿り着いた。

そこには水のと風のが既に居た。

水のは随分と不機嫌そうで、風のは酷く落ち込んでいた。

彼らはこちらを見たが、何も言わず長と彼女のやり取りを見ているだけだった。

私は勿論、ずっとそばに居た。

彼女の命の火が消える、その時までそばに居ると己に誓ったからだ。

「これをお飲み」

それは水晶の杯になみなみと注がれていた。

精霊の毒だと、一瞬で分かった。

きっと彼女にはただの水に見えていることだろう。

「これは、人の毒とは違い痛みも苦しみも無い。眠るように、少しずつ感覚が無くなっていく毒だよ。……自分が良いと思った時に、飲みなさい」

「……はい……」

精霊が人を殺すために直接手を下すことはできない。何故なら汚れてしまうから。

けれど、杯を持つ手を支えるくらいはできる。

私はそっと彼女の手を取った。

「火の、精霊さんっ……」

「大丈夫だ。私がずっと一緒にいる。——だから、恐ろしいことは何も無い」

彼女は今にも脆く崩れてしまいそうだった。

——最期まで、支え続ける。

震える手が杯を握った。

その手を私が包んだ。

とても、冷たい。

体の芯から震えているのだろう、手も小刻みに震えていた。

彼女の唇が杯に触れ、くつと傾いた。

一口、そしてもう一口。

気づけば水のと風のも、そばに居た。

水のは彼女の頭を撫でながら涙を流している。

風のは彼女の肩を支えながら歌うように呟いていた。

彼女は飲み干した。

飲み干した次の瞬間にはもう、私は杯を壁に叩き付けていた。

そして長が森の妖精達に用意させた敷布に、彼女の体を横たえた。

風のが力を使って移動させようといったが、私は少しでも多くこの

体の感触を覚えていたかったのだ。

「ありがとうございます・・・」

彼女が我らにそう言って、私はもう一度細い体を抱き締めた。

精霊として世界に生み出されてどれ程の時を過ごしたか、見当も付かない。

けれどこれ程までに無力さを覚えたのは、初めてだった。

それはきつと水のと風のにも言えることだろう。

夜の訪れを告げる宵の一つ星が昇るころ。

森中が、泣いていた。

土の妹

あの日から、500年の時が流れた。

私は火の精霊王に、水のと風のも、それぞれ精霊王となった。
今日は森が随分喜んでいた。

あの日以来、森がこんなにも感情をさらけ出したことは無かったのに、だ。

あの日——大切な人間の少女を喪った日——から、500年。
長いようで、それは精霊にとってほんの一瞬だった。

ユキに罪を背負わせた人間の王子とその国は、とうの昔に滅んだ。
精霊の呪いで王子をはじめとする王族、貴族をすべて男として不能にしてやったのだ。

「火の！」

水のが住処にしている大きな湖から顔を出し、私に声を掛けた。
精霊は格に応じた住処に普通は住むものだ。

風のは花が美しい丘に住んでいる。

私も今は森の近くの火山の火口辺りで暮らしている。

けれど彼女と過ごした岩の台地だけは、手放せなかった。

あの場所は今も私が管理し何人も立ち寄れないようにしている。

「どうした、水の」

あの日から、今までお互いに不干渉だった水のとも交流ができた。風のとは、以前と同じように付き合っている。

精霊同士が交流するようになって、世界は少しだけ豊かになった。

この世界に初めて「温泉」と「温泉の精霊」が生まれた時、長は言った。

——ユキは、この世界の為に死んだのだと。

彼女は世界の意志でこの森へ落とされ、涙し、亡くなったと。だから、彼女は罪人ではない。

——ユキは罪人ではない。

それはユキの魂が赦された時だった。

「どうもおかしい。森が・・・」

「また新しい精霊でも生まれるんじゃないか？」

それにしてもこの喜び様は異常ととれた。

とりあえず水のと共に長に聞いてみることにした。

「長、森の様子がおかしい。どう思われます」

「……生まれるんだよ、新しい精霊が。いや、新しくはないか」

「それは……どういことです」

長は嬉しそうに私を見た。

嬉しそう、というのは語弊があるかもしれない。

それは安堵の表情だったからだ。

「長く不在の土の精霊が、生まれる兆しがある」

「土のが？」

元素を司る精霊にも、稀に不在の時がある。

世界にある元素の力が溜まり過ぎると、その元素の精霊は寿命を迎えたとして世界の一部、塵のような存在に戻るのだ。

そしてその元素の力が薄まるまで、次代の精霊は生まれえない。それが今までの土の精霊だった。

「あ……岩室から生まれる」

「！」

「生まれた時一人では、あの子も寂しいだろう。行ってあげなさい」

そして長に返事もせず、私と水のは駆け出した。
岩室に着いたところで、風のと合流した。

風のは長から伝言を受けてここへ急いだらしい。

私たちは、あの日以来初めて、岩室へ足を踏み入れた。

生まれたのは、女の姿をした土の精霊だった。

茶色の髪、濃茶の目の少女の姿。

あの日のまま。

「あ、の、初めましてっ！ 土の精霊でございます」

生まれ変わっても、記憶は残らない。

私たちも、それは望まない。

だから、ここから始めよう。

「待っていた——我らの妹よ」

ずっとずっと、会いたかった。

土の妹（後書き）

これにて完結です。今までお付き合いくださりまして、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2064u/>

精霊の妹

2011年9月20日19時39分発行